

2017年12月4日(月)

シンポジウム「IS後のイラク—クルディスタン住民投票と選挙に向けた政治変動」

Symposium “Iraq after IS: the Referendum and Political Change”報告

文責：山尾大(九州大学・B02研究分担者)

本シンポジウムは、「イスラーム国(IS)」に対する掃討作戦がほぼ完了した後のイラクで、IS後の政治利権をめぐる対立が激化している状況を多角的に議論するために開催された。報告者は、クルディスタン地域政府(KRG)が2017年9月25日に実施した住民投票の監視団を務めた吉岡明子(日本エネルギー経済研究所)と山尾大(九州大学)に加え、イラクから3人の高名な研究者で構成された。優れたイラクの学術機構であるバイトゥルヒクマの教授で元ムスタンスィリーヤ大学学長のファッラーフ・アサディー氏、市民社会やジェンダー、難民問題などで優れた業績を持ち、日本の研究者と共同で世論調査も多数実施しているバグダード大学教授のサラーム・イバーディー氏、そしてイラクにおける日本研究の第一人者であるバグダード大学教授のマフムード・カイスィー氏である。

まず、最初の報告、吉岡氏の「クルディスタン独立住民投票の誤算はなぜ生じたのか」では、住民投票にかかわる誤算が生じた背景として、KRG内部の分裂、イラク政府の大きな反発、国際社会の立場が強調された。そこでは、KRG内の現状や中央地方の乖離をはじめ、住民投票にかかわる概要が明確に解説された。

続く山尾氏の「ISなきイラクをめぐる競合—KRG住民投票と選挙戦略」は、IS後のイラクをめぐる政治対立を、各アクターの利害にもとづいて説明するものであった。IS掃討作戦で肥大化した人民動員隊が、政治参加(来年の選挙への参加)を始めたことで既存のシーア派イスラーム主義政党が新たな戦略をとるようになったこと、同様にIS後の利権獲得を目指したKRG住民投票は、クルド民族の統一ではなく分裂に帰結したことなどが明らかにされた。

次に、アサディー氏の“Pre-election 2018 Iraq: Islamists-Civilians Competition to Impact People Consciousness”は、2018年5月の選挙に向けた政治対立を主として世代間対立の観点から分析するものであった。現在政権の中枢を担うイスラーム主義政党は、旧体制下では亡命反体制活動を展開しており、したがって国内のイラク人の要求を必ずしも理解しているわけではない。さらに、イラク戦争後の政治利権の獲得を目指す彼らに対しては、主として青年層から大きな反発があるという。また、現在みられる政党連合の分裂も、世代間対立がその背景にあることが強調された。

続くイバーディー氏の“Displacements by ISIS in Mosul and Reflection on the Childhood in Iraq”は、ISが生み出した難民やIDPのなかでも、子供に着目して現状とその問題を議論するものであった。この報告は、UNAMIなどの様々なデータを利用して、難民やIDPとなった子供の現状を詳らかにしていった。

最後に、カイスィー氏の“Japan as an Image of Peace and Development for Iraqi Public”

は、イラクにおける日本イメージの変化を、主として在イラクの岩井文男大使の活動の分析を通して明らかにするものであった。岩井大使は SNS を通した活発な発信や文化活動によってイラク国内では「有名人」になっている。また彼は、イラク方言のアラビア語を駆使し、積極的に現地新聞などでも発言を続けている。こうした活動が、イラク国内でどのように受けられているかを分析した結果、日本をめぐっては、単に経済発展や技術のイメージから、文化的なそれも強化されていると結論づけられた。

各報告にはフロアから様々な質問がなされ、活発な議論が展開された。ジェットコースターのように激しく変動するイラクの現状を理解する、よい機会になったと思われる。